



▲今日でも続けられている、宮之浦・益救神社祭日。通称四月十日（しがつとうか）と呼ばれ、親しまれている。式典の後は、集落参加の様々な催しが行われる。

本誌第38号よりつづく――

屋久島の年中行事について三回目になる。今回は二月―六月までの五ヶ月間を紹介したい。聞きとりにより、また資料をたよりにしたが、主に集落の伝統的なものに注意し、行政や団体・企業・家伝的なものにはおよんでいない。集落と云っても主に旧村落で、全体には至ってないことをお断りしておく。

聞きとりに回って感じたことは、その行事について年配者の記憶に生きておりながら、継承されず、既に消滅の危機に瀕している行事の多いことである。一つは過疎化で継承者がいないこと、また生活の都市化もある。殊に個の優先が、共同体の仕組みを崩壊に向かわせるを原因に上げておられた。

一次産業に基盤を置いた伝統行事はかくて年々姿を消す。今日豊かな屋久島の自然が注目を集めるは、島民の山林保護の精神を培った伝統行事「岳参り」などに支えられて来たことを、忘れてはなるまい。

文献資料
紹介

〈第39回〉

【年中行事関係綴】

やまもとひでお
山本秀雄

二月から六月の行事

二月一日

○ ナラビノツイタチリまたは初ツイタチと云って神参りをした。宮之浦ではお彼岸様とも太郎の節句とも云い団子をつくり仏前にお供えする。麦生では一月十四日小正月に作って神棚に上げたメーザシ（ケズリカケ）を下し、団子を上げる。

島内各集落とも神参りをし、団子を上げたものだが、昔風に自家

二月二十五日

製は少なくなり、昨今は御菓子屋から求めて神仏にお供えをしているようである。

○ 日増祭Ⅱ一四八七年、種子島第十一代時氏公、日増上人（本能寺第七世管長）を招く。時に屋久島の鳴動つづく。これを鎮めんとして一四八八年日増上人屋久島に来島、その徳を謝する祭が古来からあった。麦生では二月二十五日に行われた。

○ 田ノ神祭Ⅱ二月中の行事。麦生では旧二月、苗代を作ったが、水を引く前に水口で田ノ神祭りを行った。柳箸と媒竿（旧年十二月二

十七日に作ったもの)を立て、御洗米(又は握飯)とお酒を供えて祀る。また近所には握飯を配った。

○ノイネ屋久島では田んぼが少く、昔ノイネを作ったものだが、トキオイという品種は台風が多くなる盆前に取り入れるため、種子蒔ヲ二月(旧)中に行つた。赤米であつた。

○材木伐り(一二月の行事)屋久島では建設材や船材は最も寒い一月〜二月に伐つたという。十分にかからしてから十二月頃に山を下した。

三月三日

○節句(今雛祭とも女の節句とも云つて、雛かざりをし神社参りをするが、昔は磯あそびとも、浦まつりとも云つて弁当持参で、海浜や野山に遊び興じた。

○日は不定、山の供養(山野で共同作業の人達がかたり合い山供養を行う。また各自の家でも行う。その日は必ずお寺か神社で報賽のお札を書いて山の入口に立て、祈願をした。

三月二十一日

○彼岸(春分を中日にして前後各三日の七日間を、仏祭と結びつけ、この間に島では先祖供養・墓参が行われ、親戚縁者の無事・息災を祈願する。

四月八日

○釈迦祭(宮之浦に釈迦堂がある。近くの人たちは釈迦堂参りをした。なお現在、久本寺檀家の婦人部による一七日(一週間)、法華經奉納会が行われている。

四月十日

○益救神社祭日(益救神社(祭神/彦火火出見尊(山幸彦)は、屋久島が古く朝廷の南島経営の拠点として、大陸航路の安全祈願所の任務をもつ、南島で唯一の延喜式内社である。経営も明治に至るまで官費の資格にあつた。

四月十日はその例大祭日、当日は集落全員参加、式典後は神社に

前夜からおこもりした二才衆(青年)ノ昇ぐ、神輿の渡御が行われる。神輿は練りあることなく、静かな行列で村内を廻る。宝物・幟・社額・錦の旗・太刀・鉾・弓・ご神饌などを供奉して、神官・伶人・氏子・役人・一般参拝者をつづく。廻路は昔の大通り、宮之浦川に平行した三筋か四筋であるが、途中旅所(昔は宮之浦川の川岸に沿うて白砂の浜があり、その浜に前日設営された)に休憩する習わしであつた。

考えるに宮之浦川の河口右岸に「海幸彦」を祀る川向神社があり、この渡御は山幸の弟神が、海幸の兄神の社に渡るものではなかつたか。渡御は式典を終えた午前十一時頃、帰りが午後三時頃である。現在は神輿の帰りは午後に至らない。午後には年一度の大祭とあつて盛大な余興が、区内組ごとに奉納される。江戸中期の「屋久島記」という奉行所役人の手記によれば、昔は浄瑠璃、芝居狂言など、三日間にわたって賑わつたと記されている。

四月十一日

○漁祭(初浦まつりとも云う。もともと両者は別々に日を得ていた様である。近年になって本来豊漁祈願のため、益救神社祭と重なつて、一緒の祭り行事となつたようである。

四月十日の余興であるが、五月の飛魚漁期、田植えと多忙を極める農漁業の前祝的な意味もあつて、当日は手弁当の参拝者と共に大変に賑わう一大行事で、歌踊、カラオケすべて自前の舞台で芸を競う盛大なものである。

○岳マイリ(登山日は集落毎に違うが一時下火になつていた行事が、昨今見直されて、春・秋と年二回実施されている。春は四月中、秋は九・十月に行われる伝統的行事である。

島の中央には奥宮(集落それぞれ村の奥岳に一品法寿大権現様の碑祠を建てて奥宮とよぶ)、奥岳(奥宮)に対して前岳にも同様の碑石がたてられているが、春の岳参りは豊作・豊漁・家内安全を祈願し、秋は願成就の願ほどきという次第の参拝に、村の代表者が登

山する。代表者は各二、三人で、寒銭、酒、白砂・海草（ほんだわら）・洗米・塩などのお供物の外、特別村人からの依頼の品物を携帯してゆく。選ばれた代表者は前夜から村のお寺か神社におこもりして、清浄潔斎のみそぎを海に入って行い、お払いを受けて日の出と共に出発する。第一の詣所まで村役人の見送りを受ける。（この詣所は帰途の出迎えを受け、サカムカエの儀礼の場となつて、登山した代表者に村役員から酒肴が与えられる場所でもある。）

代表者はその日は奥岳についても参拝はせず、奥宮の下方で更に一泊おこもりして翌早朝に神饌をお供えし、祈願して帰る。昔は村人に石楠花の小枝をお土産に持参したというが、今は自然を守ることから祈願に止めるのである。（以上は楠川村の岳参りを参考にした。集落によって方式は異なっている。）

五月二日

○ エビス祭Ⅱ八十八夜に行う恵比須祭は、豊漁の前祝として漁村で行われる。浦々のエビス神の前に山海の料理をお供えして祝う。主に船主、網主、舟子を中心になる祭で、昔は年に十回位も行ったという。因に島にエビス神は四十数ヶ所も祀られている。

五月五日

○ セックⅡ（端午の節句）各集落・各家でアクマキというを作る。餅米を草木の灰汁につけておき、竹の皮に包んで紐（五島シバともミチシバとも云う藺草）で解けないように巻き、米つぶがとけるぐらい煮る。またダチクという竹の葉に同じように餅米を巻いて煮たものもある。これはツノマキと言う。角が四ツある。またカカラン団子（餅米を引いて粉にしたものにヨモギの葉をまぜて蒸して搗きこんだ団子）を神・仏にお供えする。親戚身内にも配る。

この日は男の節句・菖蒲の節句とも云つて、菖蒲とヨモギを床に祝い、また玄関の上、屋根にも差して、悪病退散のマジナイにもしたが最近では極く希にしか見かけなくなつた。

○ 押舟Ⅱこの日は男の節句と云うがためか、または川の神（カッ

パ）の災難からのがれるためか男子十二・三歳の子供から、青年の若者のオシブネ競争が、宮之浦・安房・栗生・永田など大川の川口で行われるものだったが、飛魚漁の衰退と共に舟を失い、漕ぎ手を失つて、最も屋久島らしい伝統的民俗行事が消滅した。

五月十六日

○ 山シ神祭Ⅱ山仕事に関係する業者・個人はこの日は山を休み、個人で、または仲間と共に山神に酒肴を上げて相伴をする。

五月二十三日

○ 二十三日夜待Ⅱ本誌38号74ページ、正月二十三日参照。

麦生や原などでは、五月も大事な折目として祭られている。

五月三十日

○ 万の祝Ⅱ明治から大正・昭和の戦前は飛魚漁の盛んな時で非常に盛大に行われた。各船紅白の幕を張りめぐらせて、エビス様の前で、飲めや唄えの大祝をした。もともとは鯉を年に万頭以上釣り上げた時に、「万の供養」と称して、鯉の霊を慰める供養祭に始まるという。「三国

美しい屋久島の自然を
描いてみませんか。

環境にマッチした
看板を作りませんか。

美術教室の
種子島美術研究所

看板の
浜田画材店

名勝図会」巻十七（明治三十八年）に「鯉を年に万頭釣った時には「万の供養」として祝い、先ずエビス殿という唄、次に高砂の小謡、次に琉球歌の佳例よし、次に千ジヨ、万ジヨの歌舞がある。」と記している。今は万の祝をする程の漁獲はなく、早晚この行事は消滅し、歌舞も忘れられようか。

五月二十五日

○ 如竹祭 五月二十五日は如竹の命日である。島民のために経済発展に尽くし屋久杉の平木生産指導や用水工事等と功績があり、当時薩南に於ける第一等の儒学者であった翁を尊敬する島民が、その遺徳をしのんで行うお祭。現在は翁の生地、安房集落の行事として継承されている。踊りは静かで能舞のようである。唄は「本誌第36号81ページ」に紹介がある。ご参照下さい。

六月一日

○ 万石ツイタチ 麦生では、正月の餅を小さく切って保存しておいたものを焼いて、水につけて神様に供えた。小瀬田では新唐芋（早植え）で菓子を作ってお供えする。宮之浦では無事半年経過を祭るとして、スズリブタ（七重）および本膳（高膳ともいう足つき）に御馳走を作り、各戸賑やかに祝う。

○ 虫祈禱 梅雨上がりの稲作等農作物に虫の発生する季節とあって、お寺からお札を貰って田畑・家屋にも立てた。虫除け・虫送りの行事、今日町行政が行う衛生上からの薬剤散布同様、各区、集落毎に集団で行ったともいう。

六月十日

○ 六月灯 益救神社六月灯、川向神社六月灯。その他一定しないが、各集落の神社・仏閣で行われる。

六月十三日

○ 日蓮宗仏寺の六月灯

六月十五日

○ お祇園様祭 名前は残っているが、行事を行わない。昔からこの

日は冷麦麵、煮メ料理でもなされた。尾の間では棒踊りが行われた。

○ 流れ舟 昔は流し舟 宮之浦川・安房川で主に行われる。

現在も六・七・八・九月まで盛んであるが、お酒弁当思い思いの料理を持ち込んで、賑やかに歌い、おどる。昔は太鼓三味線で騒ぐが、今はカラオケで、しかも観光的色彩が強く、住民が自家舟を使用することも少なくなった。

○ 天満宮例祭日 旧六月十五日 宵祭であって、この祭には

オットメヤクというのが神官の他に一人出る。村の最古参者である。集落の役員や神官によって行われるが、その夜オットメ役は神前右上座に坐って、動くことは許されない。昔は小便にも行けなかったので、朝から水気を取らなかつたという。

六月十六日

○ 水神様祭 麦生では水神様の碑の前で、村役員により水神祭りを行う。現在は日も一定していなく、ごく簡単なものである。



新築
移転

この度Aコープ前に移転いたしました。今後とも よろしくお願ひいたします。

●写真のトータルショップ

中峰写真館

中峰秀典

〒891-42 鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦2368-17

☎ 09974(2)1248